

和詠
詩集

懷風藻

柳澤龍吉詠

和 詩
詠 集

懷
風
藻

榊
澤
龍
吉
詠

學 燈 社

著者略歴

明治三十七年三月六日、長野県北佐久郡平根村横根に生まれる。平根小学校・野沢中学校・立教大学文学部史学科卒業。

宇都宮師団・牡丹江師団・東寧師団に所屬。シベリア抑留三年。帰還後、公職追放三年。

岩村田中学校・望月高等学校・上田城南高等学校に奉職。現在、佐久高等学校勤務。傍ら郷土史研究に従う。

立教時代より詩誌「地上楽園」同人。白鳥省吾先生に詩と民謡、長谷川伸先生に脚本と小説、佐藤春夫先生に小説と漢詩和訳を学ぶ。

著書 詩集「軍国時代」昭和三十

十六年刊
住所 長野県佐久市上平尾



和訳 詩集 懷風藻 定価一二〇〇円

昭和四十七年九月一日印刷
昭和四十七年九月十五日発行

著者 榎澤龍吉

発行者 石井時司

印刷所 大盛印刷株式会社

東京都新宿区戸塚町一の一〇
郵便番号 一六〇

発行所 株式會社 學燈社

振替 東京 三六二五三
電話 代表 (二〇二) 四六三一

和歌
詩集

懷風藻 目次

前 書

懷風藻序

大友皇子

河島皇子

大津皇子

積智藏

葛野王

中臣大島

紀麻呂

文武天皇

大神高市麻呂

巨勢多益須

犬上王

二首

一首

一首

一首

二首

二首

二首

二首

一首

三首

一首

二首

一首

六

二

六

八

九

四

六

元

三

四

六

四

四

大伴旅人	一首	三
中臣人足	二首	五
大伴王	二首	七
道首名	一首	八
境部王	二首	九
山田三方	三首	三
息長足	一首	七
吉智首	一首	九
黄文備	一首	一〇
越智広江	一首	一三
春日蔵老	一首	一三
背奈行文	二首	一四
調古麻呂	一首	一七
刀利宣令	二首	一八
下毛野蟲麻呂	一首	二三
田中浄足	一首	二四

長屋王	三首	一一五
安倍広庭	二首	一一〇
紀男 ^と 人 ^{ひと}	三首	一三三
百濟 ^く 和麻呂 ^{やまと}	三首	一三七
守部大隅	一首	一三三
吉田宜	二首	一三三
箭集 ^や 蟲麻呂 ^{つめ}	二首	一三六
大津 ^{おびと}	二首	一三九
藤原 ^{ふさ} 総前 ^{さき}	三首	一四三
藤原 ^{うま} 宇合 ^{かひ}	六首	一四四
藤原 ^{まろ} 万里	五首	一五九
丹墀 ^{たちひ} 広成	三首	一六〇
高向 ^{たかむき} 諸足 ^{もろたり}	一首	一七一
釈道慈	二首	一七三
麻田 ^や 陽春 ^す	一首	一七六
塩屋古麻呂	一首	一七九

伊 ^い 支 ^き 古麻呂	一首	一八〇
民 ^{たみ} 黒 ^{くろ} 人 ^{ひと}	二首	一八三
釈 ^{しやく} 道融	一首	一八五
石 ^{いその} 上 ^{かみ} 乙麻呂	四首	一八六
葛 ^{かち} 井 ^み 広成	二首	一九三
系譜		一九五
後書		一九六

前 書

日本最古の漢詩集は、天平九年（七三七）に歿した藤原宇合に詩集二卷があったというが、その題名さえ知られていない。続いて天平勝宝二年（七五〇）に歿した石上乙麻呂に詩集「銜悲藻」二卷があったが、惜しくも失われて伝わらない。次が天平勝宝三年に成った詩集「懷風藻」で、千二百二十年後の今日、これは転写本ながら奇蹟的に現存している。「懷風藻」に刺戟されて編集されたのが「万葉集」だというから、「懷風藻」こそ実に現存する日本最古の輝かしい詞華集である。

「懷風藻」の詩人は六十四人、天皇・皇族・官吏・僧侶と上層階級の人々だけで、中に歸化人の子孫が十数人いるが、女性は一人もいない。「万葉集」が上は天皇から下は庶民に至る男女の一大国民歌集という壮観には及ばないが、当時はまだ学問が普及せず、一般庶民や女子にとっては漢詩は縁遠いものであったから止むを得ない。また万葉の歌人を兼ねる者が十九人いる。序文に詩数は凡そ百二十篇とあるが、失われたものもあり後人の作の紛れ込みもあり、それらを整理すれば百十六篇になる。

「懷風藻」の詩は、近江大津京（六六七）から飛鳥浄御原京（六七三）、飛鳥藤原京（六九四）を経て平城京（七一〇）の天平勝宝二年（七五〇）に至る、即ち飛鳥後期（七世紀後半）から奈良初期（八世紀前半）の約八十年間の作品を集めたもので、前半四十年は白鳳文化、後半四十年は天平文化に属する。これをどこまでが白鳳、どこから天平と一線を引くことは難しいが、作品の序列が作者の生存年によるというから、大ざっぱに前半が白鳳、後半が天平ということになる。白鳳期の作は中国六朝詩の影響を受けており、天平期の作は六朝詩の他に初唐詩の影響を受けているというが、盛唐の李白（七六二歿）、杜甫（七七〇歿）の影響はまだ現われてい

ない。異国の文字と詩形とを借りて日本人の思想感情を表現したものであるから、どこか未熟でどこちなく、平仄や韻が整っていないとか、故事が多過ぎて煩雑だとか、模倣の語句があるとか、用語が不適で和習だとか、多少の欠点はないではないが、音読しないで訓読したもので、在来の和歌とは全く別個な、単なる模倣を越えての新しい詩文学を創造しており、古代日本文学を豊富にした点は讃えるべきである。

「懷風藻」の序文は、学問の伝来、文化興隆の経緯、詩篇探索の苦心、編纂の主旨、題名の由来などを述べて、四六駢儷体の堂々たる名文である。撰者は相当の地位の人で優れた学者だったに相違ないが、序文になぜか氏名を明記していない。淡海三船か石上宅嗣か、その他かという説もあるが、いずれも確証がない。古代文学保存の功労者たる撰者の不明なのは遺憾である。

奈良時代は実に日本文化興隆期で、華々しい天平文化を築き上げている。文化史年表を開いて試みにその一端を見よう。

和銅三年（七一〇） 平城遷都。

〃 五年（七一二） 「古事記」成る。

〃 六年（七一三） 風土記作成の命下る。

養老四年（七二〇） 「日本書紀」成る。

天平五年（七三三） 「出雲風土記」成る。

天平三年（七五二） 「懷風藻」成る。東大寺大仏殿完成。

勝宝三年（七五二） 東大寺大仏開眼式。

〃 四年（七五二） 以降、「万葉集」成る。

天平三年（七五九）

右の通りで、記紀・風土記の後を受けて、「懷風藻」は世界最大の木造建築たる東大寺大仏殿と年を同じくして成立している。その後に「万葉集」の編集が続くのである。

翻って西洋を見るに、「懷風藻」が成立した七五一年、西欧のフランク王国ではメロヴィンガ朝の国王を廃し

て小ビビンが自ら王位につきカロリング朝を始めたばかりである。また八世紀は東欧の東ローマ（ビザンツ）帝国では政治が不振でビザンツ文化も衰退していた。当時は中世前期の不安動揺の暗黒時代で、古代ギリシア・ローマ文明は地に落ち、中世文化は未だ芽生えず、イギリス・ドイツ・フランス・ロシア・イタリア諸国の遙かに建国以前であることを思えば、日本の「懷風藻」「万葉集」の存在は、文学史上、如何に貴重なものであるかが知られるであろう。

さて、「懷風藻」はその成立から二百九十年後、平安末期の長久二年（一〇四一）、文章生こはむねたかし惟宗孝言によつて書写されている。それがまた三百年後、南北朝初期の康永（北朝）元年（一三四二）の頃、京都蓮華王院（三十三間堂）の蔵本を無名の某が見つけ出して書写している。天平の原本はもとより右の二写本も残念ながら所在不明である。他にも写本があったかも知れないが、今日、伝えられている写本・刊本はすべてこの惟宗写本の系統だという。現在、「懷風藻」の写本は極めて少なく、内閣文庫蔵本二、東京大学蔵本二、天理図書館蔵本二、名古屋蓬左文庫蔵本一、島原公民館蔵本一、静嘉堂文庫蔵本一、計九しか判明していないようである。

「懷風藻」が木版本になったのは江戸時代で、左の四種がある。

天和四年（一六八四） 碧鷄堂版

宝永二年（一七〇五） 演古堂版

寛政五年（一七九三） 竹苞楼版

年代不明（？） 群書類従版

右の四刊本が流布して江戸時代には相当に読まれたらしいが、「万葉集」ほどには研究されていない。明治時代には一本も出版されなかった。明治大正の詩人達は、西洋詩の吸収に忙しく、日本最古の漢詩集など顧みる暇がなかったようだ。大正には宝永本の補刻があり、寛政本の復刊があったが、活字本では大正末年に漸く一部、昭和になって三部、全集本類に「懷風藻」が収められている。左の通り。

日本古典全集本（大正十五年刊）

日本文学大系本（昭和二年刊）

日本文学類従本（昭和三年刊）

日本古典文学大系本（昭和三十九年刊）

註釈書は江戸末期の元治二年、即ち慶応元年（一八六五）に初めて出来たが出版されず、明治大正は絶えてなく、昭和に入って漸く出版されている。左の通り。

懷風藻箋註 今井舎人著 元治 二年稿

懷風藻新釈 釈 清潭著 昭和 二年刊

懷風藻註釈 沢田總清著 〃 八年刊

懷風藻詳釈 世良亮一著 〃 十三年刊

懷風藻 杉本行夫著 〃 十八年刊

懷風藻新註 林 古溪著 〃 三十三年刊

いずれも戦前版が多く、今日では入手し難い。戦後の林氏本は明治書院版だが、これも絶版で容易に手に入らない。日本古典文学大系本は岩波版で、小島憲之氏の優れた校註があり、相当に出廻っているので入手し易い。

「懷風藻」の研究論文は文学史書、雑誌、講座中には相当あるようだが、単行本としては至って少なく、「懷風藻と日本文化」（山岸徳平著・昭和十八年刊）、「懷風藻の研究」（大野保著・昭和三十二年刊）がある位で、特殊なものでは騰写版の「懷風藻漢字索引」（柴田甲二郎編・昭和三十二年刊）がある。

韻文訳「懷風藻」の出版はまだ聞かない。佐藤春夫先生に韻文訳の意図があったが、遂に果たされなかった。多分、私の「和訳詩集懷風藻」が最初になるであろう。原詩に即かず離れず、作意を生かすように心掛けて訳した。総序の和訳は巻頭に掲げたが、数名の詩人の略伝記と詩序は敢えて割愛した。要は漢詩の韻文訳に重点があるからである。その代わり、詩人とその作品を理解するために必要な註記を書いて置いた。

厳密に云ったら、私の訳は誤訳が多いであろう。「懷風藻」は奈良時代の古語で訳すのが理想だが、それは不

可能なので漠然と古代語で訳した。例えば奈良朝の詩会を平安朝の歌合と訳した如き、誤りは承知の上である。原詩には平凡な作もあるが、唐詩に匹敵する珠玉の作品もある。粗朴な原石のようなもので、原詩は難しく取っつきにくいようでも、訳して見ると意外に素直で、光っているものもある。物によっては「万葉集」の長歌より興深く、明治の新体詩より面白く、西洋詩に比べて劣らないものさえある。

詩の翻訳は原詩を素材として一種の創作である。原詩の精神を生かしさえすれば、どんな形式にどう訳してもいい筈である。今後、「懷風藻」の研究と平行して、盛んに韻文訳・自由詩訳の出ることを期待する。古代日本の誇るべき遺産である「懷風藻」の面影を適切な訳詩によって今日に伝えることも意義あり、詩人のしなければならぬ任務の一つであると信ずる。更に良い訳者を得て、外国語に翻訳して海外へ紹介することも望ましい。訳詩と比べて原詩を読む人の便宜に、白文を掲げて語釈を添えて置いたが、出版社の意向により白文を読み下し文に改めたので、古典の良さを味読して頂きたい。

懷風藻序

遠く先哲に聞き、遙かに記紀を見るに、日向の高千穂の峰に天降りませるの世、大和橿原に国を建つるの時は、天地創造にして人文いまだ興らざりき。

神功皇后の三韓を征し、応神天皇の即位せらるるに至り、百濟は入貢して經典を厩坂に開き、高麗は国書を奉るに鳥の足趾(象形)文字もて記せり。王仁わには始めて論語を輕島宮に講じ、王辰爾は終に訳田宮せきたに於て鳥の足趾文字を訳し教へぬ。遂に世人をして孔子の学風に進み、儒教の道に赴かしめたり。

聖德太子に及ぶや、冠位十二階を定め、十七条憲法を制す。然れども専ら仏教を貴び、未だ詩文を草するに暇あらざりき。天智天皇の即位せらるるや、改新の大業を開き、集権の計画を弘め、道理は天地に通じ、功業は天下に輝きたり。既にして思へらく、風俗を教化せむには文より貴きはなく、徳を養ひ身を立てむには学を先にするに如かずと。ここに即ち学舎を建て、英才を召し、五礼を定め、諸々の法度を定む。律令の規模宏大なること、古来、未だこれ有らざるなり。

ここに於て天下太平、國家繁榮、天子は巧まらずして治め、宮廷に暇多し。即ち文學の士を招き、時に豊御酒とよみきの宴を開く。この際に當り、天子は御製を示し、諸臣は頌詩を奉る。秀麗の詩文、優に百篇を越えたり。但し、たまたま壬申の乱に逢ひ、悉く灰燼に帰す。その亡失を思ひ、嘆き悼みて胸を傷ましむ。

これより後、詩人の輩出あり。大津皇子は雲鶴に大志を吟じ、文武天皇は久方の月舟を詠ず。大神中納言は白髪を悲しみ、藤原太政大臣は天地自然の道を歌ひ、実績を前代に掲げ、佳名を後世に伝ふ。

余、微官の余暇を以て心を文苑に遊ばす。先人の遺跡を見て風流の古き遊びを偲ぶ。故人の消息こそ知るに由なければ、遺稿はここに在り。詩題を撫して遙かに憶へば、涙の留まるところを知らず。秀作を探して遠く尋ね、名声の空しく落ちむことを惜しむ。

遂に乃ち紙魚の古書を収め、壬申兵火の逸文を集む。遠くは近江朝よりここ平城京に至るまで、凡そ百二十篇、録して一卷となす。作者六十四人、つぶさに姓名を記し、並びに位階官職を篇首に掲ぐ。余がこの書を編む所以は、將に先哲の遺風を忘れざらむが爲なり。故に懷風を以てこれに名づくとしか云ふ。時に天平らけく勝れし宝三つの年、星は辛卯かうに宿る冬の霜月なり。

懷風藻序

遯く前修に聴き、遐かに載籍を觀るに、襲山降蹕の世、樞原建邦の時、天造草創にして、人文未だ作らず。神后坎を征し、品帝乾に乗するに至りて、百濟入朝し、龍編を馬廐に於て啓き、高麗上表し、鳥冊を鳥文に図す。王仁は始めて蒙を輕島に導き、辰爾は終に教へを詛田に敷く。遂に俗をして洙泗の風に漸み、人をして齊魯の學に趨か使む。聖德太子に逮ぶや、爵を設け官を分ち、擧めて礼儀を制す。然れども専ら釈教を崇び、未だ篇章に遑あらず。淡海先帝の命を受くるに及ぶや、帝業を恢闡し、皇猷を弘闡して、道乾坤に格り、功宇宙に光れり。既にして以為へらく、風を調へ俗を化するは、文より尚きは莫く、德に潤ひ身を光らすは、孰れか學より先ならむと。爰に則ち庠序を建て、茂才を徵し、五礼を定め、百度を興す。憲章法則、規模弘遠にして、竇古以来、未だこれ有らざる也。これに於て三階平煥、四海殷昌、旋纒無為にして、巖廊暇多し。旋ち文學の士を招き、時に置體の遊びを開く。此の際に当り、宸翰文を垂れ、賢臣頌を献ず。雕章麗筆、唯に百篇のみに非ず。但し時に乱離を経て、悉く煢燼に従ふ。言に煙滅を念ひ、軫悼して懷を傷ましむ。これより以降、詞人間出す。龍潜の王子、雲鶴を風筆に翔らせ、鳳翥の天皇、月舟を霧渚に泛べ、神納言の白髮を悲しみ、藤太政の玄造を詠ぜる、茂実を前朝に騰げ、英声を後代に飛ばす。余薄官の余間を以て、心を文囿に遊ばしむ。古人の遺跡を閱し、風月の旧遊を想ふ。音塵渺焉たりと雖も、而して余翰ここに在り。芳題を撫して遙かに憶へば、涙の泫然たるを覺えず。緡藻を禁ぢて遯く尋ね、風声の空しく墜ちむことを惜しむ。遂に乃ち魯壁の余蠹を取め、秦灰の逸文を綜ぶ。遠く淡海より、云に平都に暨ぶまで、凡そ一百二十篇、勒して一卷と成す。作者六十四人、具に姓名を題し、並びに爵里を顕はして、篇首に冠す。余の此の文を撰する意は、將に先哲の遺風を忘れざらむとするが為なり。故に懷風を以てこれに名づくと云ふこと爾り。時に天平勝宝三年歲辛卯に在る冬十一月なり。

「懷風藻」の序文は、漢学の伝來、文化興隆の経緯、詩篇探索の苦心、編纂の趣旨を述べて、四六駢

體体の堂々たる名文である。撰者は相当の地位の人物で優れた学者だったに相違ないが、なぜか氏名を明記していない。淡海三船か石上宅嗣かその他かという説もあるが、いずれも確証がない。前修は昔の世に知られた人、先哲。載籍は書物、古事記・日本書紀。襲山降蹕は日向の襲の高千穂の峰に天孫ニニギノミコトが天降った神話。檀原建邦は神武天皇が大和檀原に即位した建国神話。神后坎を征すは神功皇后が坎（北方）の三韓に出兵した故事。品帝乾に乘ずは品陀和氣命、即ち応神天皇が即位する。龍編は立派な書物、經典。馬廐は百済の阿直岐が良馬を献上した厩坂で皇子菟道稚郎子に經典を教えた故事。鳥冊は鳥の羽に記した文書。鳥文は鳥の足趾（象形）文字。王仁は百済人、漢の高祖の子孫。蒙を導くは幼に教える、王仁が皇子菟道稚郎子に「論語」を講義した故事。輕鳥は応神天皇の都。辰爾は百済の貴須王の子孫。教えを敷くは王辰爾が高麗の国書の鳥の足趾文字を訳して教えた故事。沢田は敏達天皇の都。洙泗の風は孔子の学風。洙泗は孔子の故郷の川の名。齐鲁の学は儒学。齐鲁は孔子の故郷の地名。爵を設け官を分つは冠位十二階の制定。礼儀を制すは憲法十七条の制定。釈教は仏教。篇章は詩文。淡海先帝は近江大津京の先の天智天皇。帝業は大化改新の大業。恢開は開く。皇猷は天子の計画。弘闡は広く開く。乾坤は天地。庠序は学校。茂才は英才。五礼は祭・喪・賓・軍・婚。百度は諸々の法度。憲章法則是法律、近江令。覽古は往昔。三階平煥は天下泰平。四海殷昌は国家繁昌。旒纛は高貴の冠物、天子。無為は作為せずして良く統治する意。巖廊は朝廷。置醴は酒宴。宸翰は御製。文を垂るは文を示す。雕章は立派な文章。乱離は戦乱、壬申の乱。煨燼は焼け残り。煙滅は埋もれ亡びる。軫悼は嘆き悼む。間出は輩出。龍潜の王子は即位しない王子、大津皇子。鳳翥の天皇は飛ぶ鳳凰のような立派な天子、文武天皇。神納言は大神中納言。藤太政は藤原太政大臣。玄造は天地の造化、老子の説いた天地自然の道。茂実は勝れた実績。前朝は先帝の御代。薄官は微官、下級官吏。余間は余暇。文囿は文苑。音塵は消息。眇焉は遙かに遠く不明の様。余翰は遺作。芳題は表題。泫然は涙の流れる様。繡藻は美しい詩文、玉稿。風声は名声。魯壁の余蠹は魯の国の壁